

児童生徒のキャリア形成に関する調査研究Ⅰ

～キャリア形成と学力の関係～

高知県教育センター 学校支援部 研究開発担当

1 研究目的

児童生徒の基礎的・汎用的能力と基本的生活習慣、自尊感情、教科の学習意欲及び郷土愛等のキャリア形成と学力の関係について総合的に分析し、教育委員会の施策や各学校の教育活動の検証・改善に寄与する。

2 研究方法

平成25年度からキャリア教育推進地域事業（高知県教育委員会事務局小中学校課）に指定されている推進地域の児童生徒を対象に、当教育センターで開発したキャリア形成に関するアンケート¹（以下、「キャリア形成アンケート」とする。）を用い、表1のとおり調査を実施した。

本研究では、キャリア形成の要素を基礎的・汎用的能力、郷土への愛着、基本的生活習慣、自尊感情、教科の学習意欲とし（表2）、キャリア形成から学習成績につながる分析モデル（図1）を元に、分析を行った。分析にはキャリア形成の要素としてキャリア形成アンケート調査結果を、学力として平成25年度高知県学力定着状況調査の正答率を用いた。

なお、統計的分析にはIBM SPSS Statistics 21.0を用いた。

表1 アンケート調査の概要

調 査 名		実 施 期 間	
キャリア形成アンケート		平成26年 1月20日～ 1月31日	
高知県学力定着状況調査		平成26年 1月 9 日	
分析人数の内訳	男子	女子	計
小学5年生	178	198	376
中学1年生	199	157	356
中学2年生	209	151	360
計	586	506	1,092

表2 キャリア形成の要素

キャリア形成の要素	下位要素
基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力 課題対応能力 キャリアプランニング能力
郷土への愛着	
基本的生活習慣	
自尊感情	自己評価・自己受容 関係の中での自己 自己主張・自己決定
教科の学習意欲	国語の学習に対する内発的動機 算数・数学の学習に対する内発的動機 学習に対する外発的動機

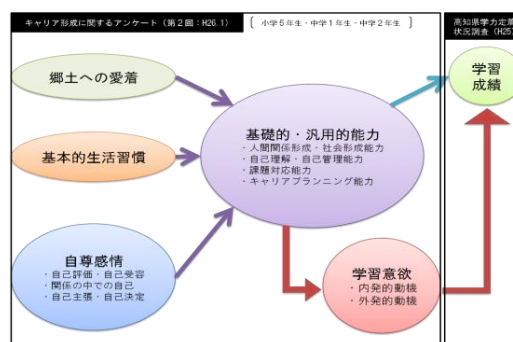


図1 キャリア形成と学力の分析モデル

¹ 「キャリア形成に関するアンケート」の尺度開発に当たっては、先行研究として東京都教職員研修センターの研究等を参考にし、項目を抽出した。それらの項目を用いて平成25年6月に推進地域の児童生徒を対象にアンケート調査を実施し、得られた回答を元に因子分析を行い、信頼性及び妥当性を検討して尺度を決定した。

アンケートは当教育センターホームページに掲載。<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/2014061600084.html>

3 研究内容

(1) 基礎的・汎用的能力に影響する要素

基礎的・汎用的能力に対する郷土への愛着、基本的生活習慣、自尊感情の影響を見るため、基礎的・汎用的能力の4能力をそれぞれ目的変数とし、郷土への愛着や基本的生活習慣、自尊感情を予測変数としたモデル1からモデル4の重回帰分析を行った(表3)。

その結果、基礎的・汎用的能力の4能力のそれぞれには基本的生活習慣と自尊感情が正の影響を及ぼしており、郷土への愛着は、人間関係形成・社会形成能力に正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。

表3 郷土への愛着、基本的生活習慣、自尊感情を予測変数、基礎的・汎用的能力を目的変数とした重回帰分析結果

	モデル1 人間関係形成・ 社会形成能力	モデル2 自己理解・ 自己管理能力	モデル3 課題対応能力	モデル4 キャリアプラン ニング能力
郷土への愛着	.237 **	.039	.036	.004
基本的生活習慣	.172 **	.348 **	.321 **	.109 **
自尊感情				
自己評価・自己受容	.084 **	.353 **	.092 **	.181 **
関係の中での自己	.349 **	.150 **	.274 **	.214 **
自己主張・自己決定	.113 **	.063 **	.294 **	.209 **
補正R ²	.503 **	.564 **	.607 **	.307 **
サンプル数	1092	1092	1092	1092

※ 表中の数値は標準偏回帰係数である。

※ ** $p < .01$, * $p < .05$

(2) 基礎的・汎用的能力から学習成績への直接的な影響

学習成績に対し、基礎的・汎用的能力から直接的な影響が見られるのかどうかを明らかにするために、各教科の正答率を目的変数、基礎的・汎用的能力の4能力を予測変数としたモデル5からモデル9の重回帰分析を行った(表4)。

その結果、いずれの教科の正答率に対しても、課題対応能力が正の影響を及ぼしていた。また、教科によって人間関係形成・社会形成能力が正の影響を及ぼしていた。一方、ほとんどの教科に対して、キャリアプランニング能力は負の影響が見られた。

表4 基礎的・汎用的能力を予測変数、学習成績を目的変数とした重回帰分析結果

	モデル5 国語正答率	モデル6 社会正答率	モデル7 算数・数学正答率	モデル8 理科正答率	モデル9 外国語正答率
人間関係形成・社会形成能力	.038	.038 *	.006	.122 **	.101 *
自己理解・自己管理能力	-.004	-.004	.053	-.058	.020
課題対応能力	.200 **	.200 **	.232 **	.186 **	.184 **
キャリアプランニング能力	-.125 **	-.125 **	-.157 *	-.057	-.104 *
補正R ²	.030 **	.038 **	.045 **	.045 **	.047 **
サンプル数	1092	716	1092	1092	716

※ 表中の数値は標準偏回帰係数である。

※ * $p < .01$, ** $p < .05$

(3) 基礎的・汎用的能力から学習意欲を媒介して学習成績に与える影響

ア 学習意欲から学習成績への影響

学習成績に対し、学習意欲が与えている影響を明らかにするために、教科の正答率を目的変数、学習に対する内発的動機及び外発的動機を予測変数としたモデル10からモデル14の重回帰分析を行った(表5)。

その結果、いずれの教科の正答率に対しても、学習に対する内発的動機は正の影響を、外発的動機は負の影響を及ぼしていた。

イ 学習意欲に対する基礎的・汎用的能力の影響

次に、内発的動機及び外発的動機に対して基礎的・汎用的能力が与えている影響を明らかにするために、学習に対する内発的動機又は外発的動機を目的変数、基礎的・汎用的能力の4能力を予測変数としたモデル15からモデル17の重回帰分析を行った(表6)。

その結果、国語の学習に対する内発的動機には基礎的・汎用的能力の4能力すべてが、算数・数学の学習に対する内発的動機にはキャリアプランニング能力以外の基礎的・汎用的能力が正の影響を及ぼしていた。学習に対する外発的動機には人間関係形成・社会形成能力と自己理解・自己管理能力が正の影響を及ぼしていた。

表 5 学習意欲を予測変数、学習成績を
目的変数とした重回帰分析結果

	モデル10 国語正答率	モデル11 社会正答率	モデル12 算数・数学正答率	モデル13 理科正答率	モデル14 外国語正答率
国語の学習に対する 内発的動機	.185 **	—	—	—	—
算数・数学の学習に対する 内発的動機	—	—	.316 **	—	—
学習に対する内発的動機 (国語、算数・数学の合成変数)	—	.246 **	—	.275 **	.251 **
学習に対する外発的動機	-.079 *	-.153 **	-.123 **	-.095 **	-.101 *
補正 R^2	.029 **	.052 **	.087 **	.064 **	.051 **
サンプル数	1092	716	1092	1092	716

※ 表中の数値は標準偏回帰係数である。

※ * $p < .01$, ** $p < .05$

表 6 基礎的・汎用的能力を予測変数、学習
意欲を目的変数とした重回帰分析結果

	モデル15 国語の学習に対する内 発的動機	モデル16 算数・数学の学習に対 する内発的動機	モデル17 学習に対する外発的動 機
人間関係形成・社会形成能力	.274 **	.273 **	.172 **
自己理解・自己管理能力	.136 **	.118 **	.130 **
課題対応能力	.346 **	.309 **	.081
キャリアプランニング能力	.055 *	.027	.008
補正 R^2	.477 **	.389 **	.107 **
サンプル数	1092	1092	1092

※ 表中の数値は標準偏回帰係数である。

※ * $p < .01$, ** $p < .05$

4 考察

これらの分析結果を元に、キャリア形成が学力に影響を及ぼす関係を図2に示す。

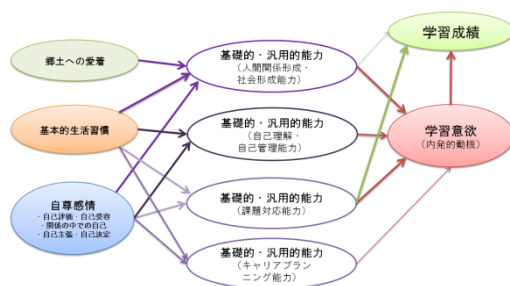


図 2 学力に影響を及ぼす関係

本を充実させていくことも学力向上への方策の一つであると考え。

また、分析の結果、学力に対してキャリア形成の要素は正の影響を及ぼすものばかりではなく、負の影響を及ぼす要素も認められたことから、学力向上に直接的につながっていないキャリアプランニング能力と学習に対する外発的動機の2点に着目して考察する。

まず、基礎的・汎用的能力から学習意欲、学習成績に及ぼす影響について、課題対応能力がどちらに対しても有意に正の影響を及ぼしていたことから、課題対応能力を高めることが学力向上につながると考えられる。一方、キャリアプランニング能力は、国語の学習に対する内発的動機には有意な影響が認められたもののその影響は他の能力に比べて小さく、また、キャリアプランニング能力が高い児童生徒ほど学習成績が低いことが明らかとなった。キャリアプランニング能力と課題対応能力の相関係数は $r = .578$ であることから、これらの能力間には中程度の相関が認められる。したがって、キャリアプランニング能力は直接的には学力向上につながっていないが、課題対応能力と相関しながら学習成績につながっていることも考えられる。また、今回の調査で使用したキャリアプランニング能力の質問項目は、将来の夢や目標の有無にかかわる内容が多くを占めている。仙台市教育委員会(2010)³によると、「将来の夢をもっている」ことは学習成績との相関はみられないが、「夢をかなえるために勉強する」ことや「将来の可能性を広げるために勉強する」ことは、学年が上がるにつれて学習成績との相関が強くなっている。調査対象地域の児童生徒の実態からも、「将来の夢や目標をもっている」と学習成績の相関はほとんどみられず(各教科正答率との相関係数 $r = -.013 \sim .059$)、仙台市の児童生徒と同様の結果が得られている。このことから、調査対象の児童生徒は、将来の夢や目標をもっているけれども、その夢や目標を実現するために学ぼうとする意欲にはあまりつながっておらず、学習

² 志水宏吉(2014)『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房

社会関係資本とは、「人間関係が生み出す力」。児童生徒たちを取り巻く人間関係の豊かさ、その信頼関係・きずなの強さを表すものである。

³ 仙台市教育委員会(2010)「学習意欲の科学研究に関するプロジェクト」

http://www.city.sendai.jp/kyouiku/k-sidou/gakuryokukoujou/gakusyuiyoku_project/H22gakusyuiyoku.pdf

成績にも反映されていないことが推測される。そのため、将来の夢や目標をもっていることにとどまるのではなく、児童生徒が学んでいる学習の意味付けを行い、夢や目標と将来の生活を結び付けることが学力向上には重要であると考えられる。

次に、学習意欲から学習成績に及ぼす影響については、まず学習に対する内発的動機が学習成績に対して正の影響を及ぼしていた。一方、親や先生に認められたいという学習に対する外発的動機で勉強している児童生徒ほど学習成績が低くなっていたことから、このような外発的動機による学習は、学習成績には直接的につながっていないことが明らかとなった。しかし、内発的動機と外発的動機の相関係数は $r=.324\sim.335$ であり、弱い相関が認められることから、外発的動機を学習のきっかけとし、内発的動機につながっていることも考えられる。市川（2001）⁴ は、児童生徒の学習を支える学習動機を、学習内容の重要性や学習の功利性により 6 分類し、学習動機の二要因モデルとして提唱しており、児童生徒は様々な学習動機に支えられて学んでいると考えられる。この学習動機の二要因モデルに照らして、調査対象の児童生徒の学習動機を詳細に調査・分析した結果（図 3）、新しい知識や学習のしかたを身に付けたいから学習する、将来の役に立つから学習するという学習内容を重視して学習する児童生徒が多く存在することが示された。また、友だちと一緒に何かしたいから、友だちに負けたくないから学習するという友だちとの関係性の中で学習する意欲を持つ児童生徒や、親や先生に認めてもらいたいから学習する児童生徒も存在している。一方、お小遣いやご褒美のために学習する児童生徒はほとんどいないことが示された。このような学習動機の傾向から、学習内容だけではなく、友だちや先生との関係性をきっかけに学ぶ意欲を見いだしていることも考えられる。

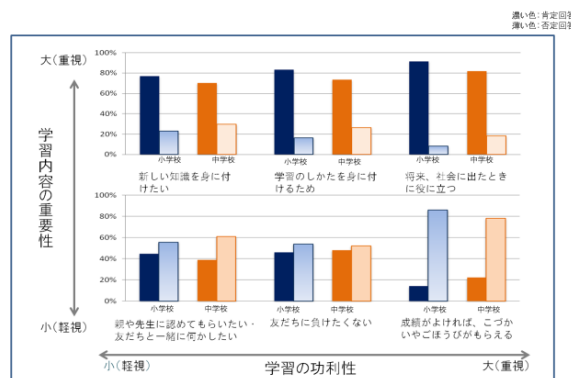


図 3 キャリア教育推進地域の児童生徒たちの学習動機

5 成果と課題

キャリア形成と学習成績の関係について明らかにすることにより、学力につながるキャリア形成を支援するための方策についてまとめることができた（図 4）。キャリア形成が学力向上につながる道筋が明らかになり、一つ一つの要素が点ではなく線でつながっていることを示すことができたことから、教員はそれぞれの指導が学習意欲や学習成績につながっていくことを意識して、児童生徒たちを指導することが重要である。

だが、今回の研究で明らかになった影響関係は、単年度の調査結果を分析のデータとしているため、因果関係とはいえない。今後もアンケート調査を継続し、パネルデータを元に、縦断的にキャリア形成と学習成績の関係について分析するとともに、児童生徒の様々な学習動機についても分析し、さらなる学力向上に向けた方策を見いだしたい。

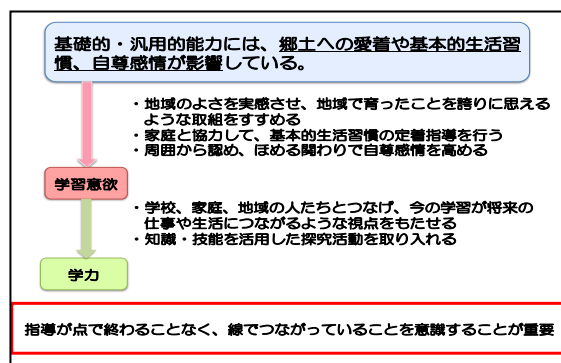


図 4 学力向上に結び付く方策

【研究体制】 高知県教育センター 学校支援部長 藤田 勇人 チーフ（研究開発担当）武市 綾香
指導主事 別役 千世 宮地 誠也
高知大学教育学部 講師 草場 実（前高知県教育センター指導主事）
高知県立清水高等学校 教頭 長岡 辰治（前高知県教育センターチーフ（企画調整担当））（平成 26 年 3 月まで）

⁴ 市川伸一（2001）『学ぶ意欲の心理学』PHP 新書
学習動機の二要因モデルは、六つの種類に学習動機を構造化した 1 つの例。横の次元は、学習による直接的な報酬をどの程度期待しているかを表す。縦の次元は、学習の内容そのものを重視しているかどうかを表す。この 6 分類の中で、代表的な内発的動機は「充実志向」、外発的動機は「報酬志向」とされる。